

君の瞳は
ポケット
の中

作・菊池翔太

□登場人物

○金子悟(24)～(39)

死体解体業の男・元コック

○日向真理恵(24)～(39)

悟のかつての恋人・故人

○轍邦夫(34)～(49)裏社会の男・悟の上司

○仁科新吾(39)～(48)

真理恵の元婚約者・会社社長

○仁科姿(5)～(14)仁科新吾の息子

○三島優奈(26)金子の隣人・女優志望

○崎山武(19)～(34)轍の部下

○金子祐一(58)悟の父・故人

□あらすじ

金子悟は、かつては洋食屋で働くごく普通の男だった。だが、ある日出会った轍邦夫という裏社会の男に、脅され、洗脳されるようになり、彼の言われるがままに、死体の処理をすることを生業にするようになった。そんな生活を十数年続けるうち、金子は人間的な感情が麻痺し、死体を切り刻むことに、なんの感情も抱かなくなった。

そんな金子のもとに、ある日一体の死体が出てくる。それは、かつて金子の恋人であった日向真理恵のものであった。何故彼女が死に、ここに来たのかはわからないし、轍も教えてくれない。過去を捨てた金子は、躊躇わずに真理恵を解体する。ほぼ彼女の肉体をこの世から消し去ったが、最後に彼女の眼球Ⅱ瞳が残った。それを潰そうとした瞬間、金子は真理恵の瞳と眼を合わせてしまう。その瞬間、金子の脳裏には、真理恵と過ごした日々の思い出が蘇る。金子は真理恵の瞳をつぶすことができなくなり、真理恵の瞳を咄嗟に自分のポケットにしまい、轍に内緒で自宅を持ち帰ることとなる。

真理恵の瞳と暮らし、ずっと見つめられ続

けるうち、金子は罪悪感を思い出すようになる。やがてそれに突き動かされるように、彼女の過去と、殺された理由を調べるようになる。だが真理恵は友人や親とも連絡を絶っており、その足取りはなかなか掴めない。わかっていたのは、真理恵には金子と別れたあとに、婚約者がいたことだ。しかも、その金子の動きが轍にバレて、余計なことをするなどと脅される。だが人間性を取り戻した金子は、轍に刃向かい、逆に彼を捕らえ、ついに死体処理の依頼人の名前を聞き出す。それは仁科という、真理恵が金子と別れたあとに付き合った男だ。仁科と真理恵は婚約状態にあったが、仁科がやがてモラハラを繰り返すようになり、やがてそれも破談になった、という。そして、仁科には、姿という連れ子がいた。真理恵は、特に姿と仲良くなり、疑似親子のような関係を築いていたが、仁科と別れたことにより、姿との関係は絶たれてしまった。真理恵はずっと、姿との再会を待ち望んでいたが、それは叶わぬまま、死んだという。

金子は、自分の罪滅ぼしのため、真理恵をもう一度姿と会わせるため、真理恵の瞳を持って、仁科のもとへ復讐に向かったが……。

■洋食屋「金びか亭」前夜

サラリーマン風の二人が、シャツターの閉まった店の前を通りがかる。

サラリーマン①「店を見て）……あれ、ここ潰れちゃったんすか？」

サラリーマン②「まあ、こう景気が悪いと、なかなかこういう店でランチってのもな」
サラリーマン①「ま、味も落ちてましたし」

サラリーマン二人、店の前を通り過ぎる。二人がいなくなった後、シャツターが中から音を立てて揺れる。

■「金びか亭」店内(夜)

食器や食材が店内に散乱し、荒廃しきった店の中。

シャツターの前で、体全体をガムテープで縛られたか金子祐一(26)が蹲っている。その祐一の腹を蹴る、巨軀の男・崎山武(19)。祐一、体を丸めて必死に抵抗する。

轍「おい、近所迷惑でしょうが」

崎山「あー、すみません。もうないとか、ジジイ、マジふざけてっから」

店のテーブルに、轍邦男(35)が腰かけ、トマトを丸齧りしている。その轍の足元に、祐一と同じように縛られ、顔がポコポコに腫れた金子悟(25)が転がっている。銀行、郵貯、全部残高ゼロ。借りられるところからは全部借りちゃったし、もう資金はこれ以上集まらないねえ……どうすんのよ？この愛の貧乏脱出大作戦」

崎山「普通に失敗っしょ」

轍「……お父さん、何が失敗だったと思う？」
祐一「え？」

轍「え？じゃなくて。自己分析だよ。何が原因でお店こんなことになっちゃったの？」
祐一「はいあの……息子の、息子の作る料理が、まずかったからです！」

金子「ふざけんなよ……」

轍「お、悟君からの反論？いいいいいよ」
金子「あんたが店のこととか考えねえで、母

さんが死んだあとも、適当にやってたツケが回ってきたんだろ？」

祐一「うるせえ、バカ！

金子「よりによって、こんな奴らに……」
すると、崎山が金子の元に駆けていき、思い切り金子の腹を蹴飛ばす。

崎山「誰に向かって言ってるんだこの野郎」

崎山、金子の髪を掴んで顔を上げさせる。怯える金子、必死に崎山から目を逸らす。とその時、シャツターが鳴る。外から誰かが、シャツターを叩き続けている。
轍、人差し指で「しーっ」というジェスチャーを皆に向ける。

しばらく音は続くがやがて、鳴りやむ。

崎山「……ったく、誰だよこんな時間に」

轍「ま、そろそろ潮時ってことだな。我々も失敗は失敗ってことで、それを受け入れ、学び、そして次に繋げなくてはならない」
祐一「次、ですか？」

轍「これにて契約終了ってことです」

祐一「あの……我々は？」

轍「我々？知らないよ。我々は貴方じゃないし、次にも連れていけない。そして片づけに関しては、この崎山に全て一任してある」
祐一「……待って！あの、助けて！」

轍「助けてって何？人聞き悪くない？俺らはただ、次に進もうとしてるだけなのに」

祐一「お願いします……」

轍「しよがねえなあ」
轍、崎山に手で支持を出す。崎山、金子の髪を掴んだまま引っ張っていき、祐一の横に並べる。顔を見合わせ、キョトンとなる金子と祐一。

轍「二人で芋虫レースしてさ、俺の前ききて先に立ちあがったほうが勝ちってことで、研修生として一緒に連れてく。特別だよ？」

金子・祐一「……」

轍「ぼさっとしない！勝負は始まっているよ」
轍が手を叩くと、祐一、必死に床を這い、轍に向かっていく。金子、その様に驚く

が、すぐに祐一を追う。

差が殆どないまま、僅かの差で祐一が轍の前に辿りつき、立ち上がるようにする。

金子、咄嗟に祐一の足に噛みつき、足を引つ張る。祐一、転倒し、床に思い切り頭を打つ。

金子、祐一より先に立ち上がるが、動かなくなった祐一の頭から、大量の血が流れる。呆然となる金子。

金子「……父さん」

崎山「人殺し」

轍「あーあ。そんなに俺らについてきたい？」

金子、放心状態のまま頷く。

轍「じゃあさ。えーと、明朝？それまでになんとかしてよ。いつでも引き払えるように。」

どうやるかは、センスで。それができないようなら、ちよつと君も連れてけないな」

「崎山、厨房に向い、適当に包丁を拾い、

金子の前に投げる。金子、震えながら、その包丁をじっと見つめる。」

■メインタイトル「君の瞳はポケットの中」

■トレーニングジム

ランニングマシンを使い、走る轍(8)。

そこに、ポケットに入っているスマホが

鳴る。轍、スマホを取り出し、画面を覗

く。内容を見て、顔を顰める。

■老人ホーム・食堂

施設にいる老人たちが、ヘルパーの力添

えで、各自食事をとっている。

部屋の壁に、轍の写真がでかどか飾つてある。

■老人ホーム・台所

皿洗いをしている金子(9)。以前より、

だいぶ痩せ細っている。

と、そこに崎山(33)が現れる。

崎山「よう。相変わらず辛気臭いなあ。こ

も、てめえも……来いよ、仕事だ」

金子「……」

■駅前(夕)

人の出入りが多く、賑わう駅周辺。

駅前でぼうっと突っ立っている金子。

と、そこに若者風のカジュアルな格好をした丸岡純一(70)が近づいてきて、金子に声を掛けてくる。

丸岡「あの……轍社長の？」

金子「ああ、はい」

丸岡「あ、今日一緒に仕事させていただきましたます丸岡です、今日はよろしくお願いします」

金子「どうも……」

丸岡「……あの、私の格好変ですか？社長に、

鍋パーティするみたいな恰好で来いって言

われて……少し張りきりすぎたかなって」

金子「ああ……」

丸岡「あの、美味しいんですかね、鍋？」

金子「え？」

二人の前に、荒い運転するバンが止まる。

運転席の窓が開き、崎山が顔を出す。

崎山「よう」

丸岡「おはようございます？」

崎山「お、元気がいいねえ。よろしくね……」

おい、金子、挨拶は？」

金子「おはようございます……」

崎山「舌打ち」ま、いいや。早く乗れよ」

金子と丸岡、車の中に乗り込む。

車の中に入ると、それぞれの席に、アイ

マスクが置かれている。

丸岡、座るのを躊躇い、アイマスクを凝

視していると、金子が躊躇なく席に座り、

アイマスクを目にあてる。それを見た丸

岡、おそろおそろアイマスクをする。

車、走り出す。

■轍の部屋(夕)

丸岡と金子、アイマスクを外す。

瀟洒なインテリアの広い部屋。その中央

に置かれたテーブルにいる轍が、青汁を飲んでいる。

轍「はい、どうもー」

丸岡「おはようございます」

轍「お、いい挨拶だ。よし、じゃあまず、タイムカードだけ押そうか」

戸惑う丸岡、言われるがままにタイムカードを押す。金子もそれに続く。「11 26 16:49」をカードに記される。

轍「もうすぐ来るから。ちよい待ってて」

丸岡「あの、来るっていうのは、何が……」そこに、チャイムが鳴る。

轍「まあ、準備しといて」

轍、玄関に向かっていく。

丸岡「準備、ですか？」

崎山「とりあえず、服、脱ぎっか」

丸岡「……え？服？」

崎山「疑問とか感じてんじゃねーよ」

丸岡がもじもじしていると、金子が服を脱ぎ始め、すぐに全裸になる。金子のリガリの身体が露わになる。

崎山「マジ、動物だな」

丸岡も、おそろおそろ服を脱ぎ出す。

■轍の家・玄関(夕)

轍、玄関の扉を開ける。

宅配業者が、大きな段ボールを持って待ち構えている。轍、書類にサインをし、業者に目配せをする。深々と帽子を被った業者の目が、一瞬覗く。

■轍の家・浴場

広いバスタブが備えつけられている。

段ボールが、金子と丸岡によって運ばれてくる。

崎山「(丸岡に)寒い？」

丸岡「はい……かなり」

崎山「大丈夫、すぐにあつたまつから」

丸岡「息を切らし(重)い……なんですこれ？」

轍「え、崎山もしかして、何も言っていないの？」

崎山「(ニヤニヤ)」

轍「お前な、悪い癖だぞ。そっか……」

崎山「じいさん、本当に鍋食えると思った？」

丸岡「はい……わりと」

崎山「食えねえよバーカ」

轍「まあ仕事のやり方は金子がちが一通り教えてくれるし。丸岡さん、悪いけど箱、開けてみてくれる？」

丸岡「え、はい……」

丸岡、言われるがままに段ボールの風を破り、中を見る。

体を丸めた状態のまま真空パックされた女性の遺体が入っている。遺体の頭部には、黒いビニールが被せられている。悲鳴を上げる丸岡。崎山、丸岡を殴る。

崎山「うるせーよ」

轍「うち、ある程度防音だからまあいいけどさあ……キーンとするから」

丸岡「それ、死んでるんですか？」

轍「生きてるように見える？」

丸岡「どうしろって言うんです、こんなの」轍「そこだよ。いろいろとやり方はある。埋める沈める。けどクライアントの意向には逆らえない。先方が、どうしてもって条件つけてきたからさ」

金子、バスタブに栓をして、死体をその中に放り込む。

轍「この世界から、消し去ってほしいって。跡形もなく」

丸岡、慌てて逃げだそうとするが崎山に押さえつけられる。暴れる丸岡。

丸岡「助けて！無理だ、こんなの……」

崎山「ここまで来て、ガタガタ言うなよ」

轍「なあ？こういうことになるから、あらかじめちゃんと説明しとけてんだ」

金子「その人、別に帰してもいいですよ。少し急げば、俺一人でも全然終わります」

轍「二体が二体になってもか？」

丸岡「……助けて！」

金子「二体だと厳しいですね」

崎山「ここでやめたら、お前の好きで好きでたまんねーお薬はどう手に入れる？あ？ありや金持ちの遊びだ。こんなんでもしなきゃ、年金も生活保護も貰えないじいさんがそう易々と買えるもんじゃねえ」

崎山、ポケットから白い粉の入った小袋を取り出し、丸岡にちらつかす。

崎山「ちゃんとすりやギヤラは払うし、これも現物支給すつから。悪い話じゃねえだろ。それとも、ここで死ぬか？」

丸岡、急に大人しくなる。丸岡、崎山を放す。観念したように、立ち上がる丸岡。

轍「シヤブねえ……俺はあんまりオススメしないけどなー、体に悪いから。オーガニックに行こうぜ、オーガニックに」

崎山「失笑オーガニックねえ……」

轍「じゃあ、俺もう出るわ。今日は多分帰らないと思うけど、崎山は残しとくから、何かあったらコイツに言って」

金子「はい」

轍「はい、よろしくー」

轍と崎山、風呂場から出ていく。放心状態の丸岡と、動じない金子。

■轍の家・物置部屋(夜)

金子、南京錠を外し、部屋の中に入る。

他の部屋と違い、衣服やら段ボールやらゴミ袋が散乱している。

金子、その中から、大きなカラーボックスを見つめる。開くと、様々な種類の刃物やトンカチ、洗剤にブラシ、トロリーなどが乱雑に詰め込まれている。

■轍の家・浴場(夜)

部屋全体が、ビニールで覆われている。

全裸で顔だけマスクをした二人、女の死体と一緒にバスタブの中にいる。

金子「基本、作業はこの中で行います。僕がいつて言うまで、絶対にここを出さないでください。中のモノも外に出さないで」

丸岡「はい……」

金子「まあ、ぐだぐだ言ってもしょうがないんで、とりあえずはじめましょう。言っときますけど、マスクの上からも結構キマすからね」

金子、真空パックを破る。

丸岡、臭いに耐え切れず、思わず胃駅を吐き出す。

丸岡「ごめんなさい……」

轍「いえ、大丈夫です。そういう、普通の人が出すものも交じってたほうが、いろいろ誤魔化しが利くんで」

丸岡「……で、どうするんですか？」

金子「まず、首落としましょう」

丸岡「首……ですか」

轍、カラーボックスを漁り、丸岡に刃の大きなナタを差し出す。

金子「骨を落とすのは大変だと思うけど、そこはまあ、押したり引いたりで、はい」

丸岡、ナタを受け取り、ぎこちなく頷く。

おそろのおそろの刃を喉元にあてる。

丸岡「この袋は取らなくていいんですか？」

金子「別に俺はどっちでも。ただ、頭にとり掛かるまで何時間か、ずつとそいつに見つめられてもいいなら」

丸岡「やめときます……」

丸岡、手を振るわせ、息を整えながら、意を決し、刃を入れる。刃を何度も上下させるが、なかなか進まない。

丸岡「これ、電ノコとか使わせてもらえないんですかね……」

金子「もらえないです」

丸岡「ですよねえ……」

やがて首が落ちる。浴槽の中に転がる首と、流れる血。丸岡、何故か苦笑いを浮かべる。

× × ×

金子「いいですか。手え動かしながら聞いてください。一人の死体っていうと何か大層なものに聞えてしまうかもしれないが、

轍さんなんかあと一時間ぐらいで帰ってくるって言うつから、それまでに風呂場は完璧に現状復帰しとけ。もし血の一滴でも落ちてたら……わかってるよな？」

金子「……」

崎山のシルエット、消える。

丸岡「(焦って)……金子さん、どうしたんですか？早くやらないとまずいですよお！」

金子、再び真理恵の顔と対峙する。カーボックスに手を伸ばし、メスを取る。意を決したように、真理恵の片耳にメスを入れ、反対側の耳まで切れ目を入れ、顔の皮を剥ぐ。

金子、顔の皮を金子に投げる。

金子「細かくして」

丸岡「はい……」

金子、皮の剥げた顔を見つめ、深くため息をつく。

■タクシー(夜)

走行する車の後部座席に座る二人、轍と、派手な服装と化粧の女・マキ。

マキ「えー、怪しい」

轍「なんでよ。俺はどこにでもいる普通の社長さんだよ」

マキ「ていうか轍さんて、ヤクザさんなんじゃないの？」

轍「馬鹿言わないでよ、今時のヤクザさんはね、タワマンなんか住めないんだよ？」

マキ「楽しみー」

■轍の家・浴場(夜)

すりガラス越しの崎山のシルエットが、乱暴に扉を叩く。

崎山「おい、轍さんもう帰ってくんぞ！」

金子「もうすぐ終わりますから」

崎山、舌打ちをし、再び去る。

丸岡「まだ肉とか残ってるのに、片づけちゃって大丈夫なんですか？」

金子「それはそれで、別の処理方法がありま

す。今は、ここを片づけること先決で」

丸岡「はい……でもじゃあ、目は？」

金子「え？」

丸岡が指差す。肉や骨が分けて置かれている容器の傍に、瞳が二つ、ポツンと置かれている。

丸岡「やだなあ。金子さんて、意外とうっかりさんなんですね」

金子「……あれも、潰して混ぜるだけです」

丸岡「さっさとやっちゃいますか……」

丸岡、浴槽から出て、瞳を二つ拾い、再び浴槽に戻る。と、丸岡、瞳を金子の前に突き出す。

丸岡「手を出したり引いたり)がちよーん！」

金子、眼前に突き出され、瞳と目が合う。

× × ×

フラッシュバック。どこかのリビング。

若い頃の真理恵と金子が、くつろぎながら、テレビで海外ドラマを見ている。

次第に、金子がうとうとしていく。

気付いた真理恵、金子の身体を揺らす。

金子「(起きて)……俺、寝てた？」

真理恵「寝かけてた」

金子「……俺、映画とか見てると、眠くなっちゃう人なんだよな」

真理恵「えー、一人で見ると約束したのに」

金子「いや、もう起きたから大丈夫……」

二人、視聴を再開する。だが金子、再びうとうとします。

気付いた真理恵、金子の脛を手で無理矢理こじ開ける。

金子「悪い……」

真理恵「いいよ、うとうととしても。起こしてあげる。目え覚ますから。何度でも」

× × ×

壁に寄りかかり、気を失っていた金子、目を覚ます。風呂場全体が、いつの間にか半分以上片付いている。

部屋の外から崎山のがサツな笑い声が聞

こえる。

■轍の家・リビング(夜)

崎山、テレビでバラエティ番組を見ながら、一人ゲラゲラ笑っている。

■轍の家・浴室(夜)

丸岡「いや、起こしちゃ悪いかなど思ったんで、わかる範囲でやっちゃったんですけど、こつから先は私わからないんで、教えてもらってもいいですか？」

金子「……眼は？」

丸岡「眼？ああ……」

丸岡、金子に、手のひらを見せる。手に、粘液のようなものがべっとりついていてる。

丸岡「私、だいぶ慣れたみたいですよ……」

金子「ああ……」

丸岡「もしかして、何か問題ありませんか？」

金子「……いえ何も。ありがとうございます」

崎山(声)「おい、もう車、駐車場入ってんぞ！」

金子、慌てて起き上がる。

■タワーマンション内・エレベーター(夜)

エレベーターに乗っている、マキと轍。

マキ「えー、本当にここ住んでるんだー」

エレベーター、止まる。2Fの表示。

轍「さ、着いたよ」

マキ「え？二階」

轍「うん、二階だけど？」

マキ「……へー」

■轍の家・玄関(夜)

扉が開き、轍とマキが入ってくる。

マキ「お邪魔しまーす……」

と、リビングのほうから、物音がする。

マキ「やだ、誰かいるの？」

轍「……」

■轍の家・リビング

轍とマキ、リビングに入る。

服を着た丸岡と金子が掃除をしている。

丸岡が床を雑巾がけし、金子が掃除機をかけている。崎山は黙って見ている。

マキ「……この人たちは？」

轍「ああ、うちの社員」

全員、マキに黙礼する。戸惑うマキ。

マキ「社員がなんで、社長の家にいるの？」

轍「いや、俺がいない間は、社員に解放してんだ、我が家を。その、遊び場として。」

社員は、家族みたいなもんだから」

丸岡「はい、鍋パーティーしました」

マキ「へー……」

轍「もう、帰るの？」

崎山「はい」

マキ、家の中の家具を、興味津々に見て

回る。轍、マキの視線が外れている間に、

崎山に口パクで「大丈夫か？」と聞く。

崎山、親指を立て、合図する。

部屋の奥に、「立ち入り禁止」というドアに表示された扉がある。

マキ「……あの部屋は？」

轍「俺の書斎。そこには、マキちゃんでも入れられないなあ」

マキ「入らないよお」

轍「いい子だ」

崎山「掃除する金子と丸岡にいつまで掃除してんだよ、そろそろ帰んぞ」

金子「はい……」

金子、掃除機のスイッチを切り、片づけようとしやがむと、視線の先に何かみつけ、目を凝らす。

オーディオ機器の下に、真理恵の瞳が落ちてる。

金子、慌てて拾おうとするが、マキが急にオーディオ駆け寄ってきたので、慌てて体を止める。

マキ「えー、スピーカー、カッコいい」

轍「BOSEのね。鳴りが違うよ。うち、防音もしっかりしてるから、ちよつとぐらい大きめに出しても大丈夫」

轍、オーデイオを再生する。洋楽のバラードが流れ出す。

マキと轍、目の存在に気付いていない。金子も、二人の様子を窺うが、身動きがとれない。

その時、掃除用具を片づけようと、丸岡が歩きだす。

金子、足元に何かあることに気づき、視線を向ける。

丸岡、掃除機と電源をつなぐコードをまたごととする。金子、咄嗟に掃除機を引っ張り、コードを張る。丸岡、コードに足が引つ掛かり、思いきり転倒する。

全員、視線を丸岡のほうに向ける。

マキ「丸岡に駆け寄り）大丈夫？今頭打ったんじゃない？」

丸岡「いえ、大丈夫です。お気遣いなく……」
轍「足にきてんじゃないの？丸さんだから」

崎山「舌打ち」

金子、皆が丸岡に気をとられている間、音もなく移動し、瞳を拾う。

崎山が、金子のほうにふと視線を向ける。

金子、咄嗟に瞳をズボンの右ポケットにしまう。

金子「丸岡さんすみません、注意不足でした」
丸岡「いえ、私もはしゃぎすぎました……」

轍、崎山を見て、怪訝な顔になり、手で払う仕草をする。

崎山「……なんともねえならほら、帰るぞ」

金子、ポケットに手を入れて、中身に気を使いながら、部屋を出る崎山についていく。丸岡も後を追う。

■轍の家・浴室(夜)

浴槽の中から壁の隅々まで、綺麗に片付いている。

轍とマキ、シャワーを浴びながら、お互い楽しそうに体を洗いこしている。

■轍の家・物置部屋(夜)

真つ暗な部屋の中。

片づけられた道具の他に、赤い付着物が覗くゴミ袋、シートの上に置かれた骨、物干し竿に吊るされた肉などが、乱雑に置かれている。

■アパート前(朝)

崎山の運転する車、老朽化の進んだアパートの前に停車する。中から金子が、右のポケットに手を入れながら降りてくる。

崎山「窓だけ開け）じゃあ、追加の作業に関しては、また連絡すつから……あ、そうだ」

崎山、金子に紙袋を差し出す。紙袋の中には、無地のDVDが沢山入っている。

崎山「プレゼント。ウチで売ってる裏ビデオ。たまには生きてる女のマンコでも見ろよ。

それともさあ、死体のマンコじゃなきゃ勃起しねえか？」

金子、左手で紙袋を受け取り、一礼して振り返る。

崎山「待てよ」

金子、立ち止まり、振り返る。

崎山「態度がなってねえな。上司に挨拶するのに、ポケットに手入れたままはねえだろ」

金子、俯いたまま、顔に汗が滲む。

崎山「(舌打ち)……まあいいや」

崎山、窓を閉じ、車を出す。

■金子の部屋・寝室

真つ暗な部屋の中。

バスローブを纏った轍、キャンドルに火を灯す。それを見て、うつとりするマキ。

マキ「おしゃれー」

轍「俺、いつもはこんなことしないよ、君が来たから、奮発したの」

轍、マキにキスをする。

■金子の家(朝)

布団と僅かな食器とゴミ袋以外、殆ど何も無い部屋の中。

家に帰ってきた金子、ポケット入れっ放しの手を出し、おそるおそる開く。真理恵の瞳が、そのまま残っている。金子、その目を惑いながら見つめる。

○金ぴか亭(十四年前)

真理恵、入口から入ってくる。中を見回すと、誰も客はおらず、床は油汚れが酷い。真理恵の顔が曇る。奥から、金子が出てくる。顔色が尋常じやなく悪い。

金子「(真理恵の顔を見て)……いらっしやい」
真理恵「いらっしやいじゃないよ……」

金子「何にします……」

真理恵「なんで、電話出てくれないの？」

金子「見りやわかるだろ？それどころじゃなかったんだよ」

真理恵「もつと酷くなってるじゃん……」

金子「もつとつてことは、やっぱり前から酷いと思ってたんじゃない……嘘ばっかつきやがつてよ」

真理恵「たった一カ月でこんな……ねえ、もういいじゃん」

金子「もういいじゃんて。人の仕事なんだと思ってるんだよ。俺が必死で店立て直そうとしてんのにさあ。あれか？お前案外、私と仕事、どっちが大事なの？とか言っちゃうタイプか？そんな奴だと思わなかったよ」

真理恵「……そんなんじゃない！」

真理恵、金子の手を掴む。

だが金子、真理恵のその手を強く振りほどく。その場に倒れこむ真理恵。金子、倒れこんだ真理恵を、無表情でただ見つめている。

真理恵「……なんでそんな顔してんの」

金子「……」

真理恵「なんか、死んでる人みたいだね」

真理恵、金子の表情に怯えながら、立ち上がり、呆然としながら店を去っていく。

■金子の部屋(朝)

金子、布団に寝そべりながら、目を瞑っている。だが、すぐに開く。部屋の外から、女性の奇声が聞こえてくる。それを聞き、舌打ちする金子。

金子、だるそうに起き上がり、よろよろ歩きだそうと、足を前に出す。しかし、足元には真理恵の瞳が転がっていた。金子、咄嗟に瞳をよけ、その場に転ぶ。

金子「何見てんだよ……しようがないだろ、俺の前に来た時、お前もう死んでたろ……」

それに、やらなきや俺が殺されたんだぞ？」と、また隣の部屋から女の奇声が聞こえてきて、思わず耳を塞ぐ。

金子、しばらく真理恵の瞳を眺めると、ふと思いついたかのように瞳を拾い上げ、その臭いを嗅ぐ。顔を顰める金子。

■高校・校舎裏

設置された灰皿の前で、一人だるそうに煙草を吸っている男・外岡恒夫(30)。

外岡の姿を見つけ、金子が近づくと、外岡、金子を一瞬不審がるが、金子を認識すると顔が綻ぶ。

外岡「……え、悟？」

金子「……久しぶり」

外岡「久しぶりじゃねえよお前、何年ぶりだ？」

……痩せたなあ、お前」

金子、気まずそうにはにかむ。

■高校・理科室

生徒用の席に腰かける金子。

外岡、淹れたコーヒーを持ってきて、金子の前に渡す。

外岡「心配したんだぞ、おまえんち急になくなっちゃたから。メールも返さねえし、電話も通じねえし」

金子「まあちよつと、あつてさ……」

外岡「そっか……まあ、いろいろあるよな。で、今もやってんの？料理」

金子「今は……」

と、そこに急に校内放送が入って、外岡の話遮る。

校内放送「外岡先生、外岡先生、至急職員室まで御戻りください、お電話が入ってます」

外岡「マジか……悪い、俺ちよつと行ってくるわ。まあゆっくりしてつてよ」

金子「ああ」

外岡、部屋から出ていく。

金子、外岡がいなくなった瞬間、職員用デスクに目を向ける。

デスクの上には、鍵の束が置いてある。

■学校・理科準備室

かちやり、と鍵が開き、金子が部屋の中に入る。薬品棚に向かい、物色する。金子、その中からホルマリンを手取る。

■学校・理科室

金子、ホルマリンの瓶を鞆に入れていると、外岡が教室に戻ってくる。金子、慌てて鞆を閉じ、事も無げに振る舞う。

外岡「ん？どうかしたか？」

金子「いや、大丈夫……」

外岡「ふーん……ああ！おい！」

金子「(ビクつき)え？」

外岡「お前、この後時間ある？」

金子「……」

■外岡の家・リビング(夜)

食卓に料理が並べられているおり、金子と外岡、金子その妻・恵美(39)、娘の縁(5)が囲んでいる。外岡たち、料理を食べているが、金子は手をつけない。

外岡「(金子にビールを注ぎながら)なあ、久しぶりだな、こういうの」

恵美「うん……」

外岡「覚えているか？お前がまだ日向ちゃんと口も利いたことなくて、なんかモジモジしてつから、俺と恵美でセッティングしてや

つたの」

金子「そんなことも、あったか……」

外岡「とぼけちゃつて。お前はじまつて一時間、一言も話しかけねえでやんの。何やつてんだコイツつて、なんとかキツカケ作つてやれつて。俺と恵美で撒いたりしてさあ」

恵美「そうだね……」

外岡「おいなんだよ、テンション低いなあ」

金子「……その後、真理恵とは？」

外岡「え？そうだな……まあ、日向ちゃんともだいぶ連絡とつてねえなあ」

金子「何か聞いてないか？どこに住んでるとか、今何してるかとか……」

外岡「まあとりあえず、食べてよ。緊張しちゃうな、元とはいえコックに料理出すつて」

金子「なあ、なんでもいいんだよ」

恵美「ねえ」

金子「え？」

恵美「どういうつもりでそんなこと聞いているかわかんないけど、今更よくそんなこと聞けるね。何も聞いてないとも思ってる？」

外岡「やめろつて、男と女のことだ、二人だけの事情もあるだろうが」

恵美「じゃあ、なんで逃げたの？」

金子「逃げた？……俺が？」

恵美「とぼけないでよ、別れたあと、恵美が

お店行つたのに、居ないフリしたでしょ」

金子「待つて、なんのこと？俺は別れてから、

一回も彼女に会ってない」

恵美「妊娠したんだよ」

金子「……」

恵美「それで、金子君に相談に行つたけど、もういなくなつたつて」

外岡「もういいだろ、昔のことだ」

恵美「昔でのことで済むわけないでしょ」

金子「その、子供は？」

恵美「……堕ろしたんだよ。金子君にはわからないだろうけど、シングルマザーつて、相当覚悟いるんだから！お金もそうだし、まだ若かつたし」

と、縁が急に泣きだす。丸岡、縁を必死にあやしだす。

金子、その場で呆然となる。

■外岡の家・前(夜)

家から出てきた金子と、それを見送る外岡。二人の間に重い空気が流れる。

金子「……悪かったな」

外岡「なあ、金子。わかるよ。思っちゃまうよな。特に男はバカだから、昔の女がいつまでも自分のこと、どこかで好きでいてくれてんじゃないかって、心のどっかで考えちゃうもんじゃないよ」

金子「別に、そういうんじゃない……」

外岡「けどな、そりゃ幻想だよ。とっくに昔の男のことなんて、自分の人生から切り離してる。それが無駄だって知ってたんだよ」

金子「……」

外岡「なに、彼女は彼女で、どっかでちゃんとやっつてっから。きつと。な？」

外岡、金子の肩を抱く。

■金子の部屋(夜)

金子、ホルマリン液の入った透明の瓶に、真理恵の瞳を入れる。

金子「瓶の中の真理恵の瞳に何見てんだよ、

……見てんじゃないよ、何か言いたいことがあるなら言えよ！おい！」

と、外から扉をノックする音が聞こえる。

金子、慌てて瞳の入った瓶を布団の下に隠し、扉を開ける。

外に、三島優奈(29)が立っている。

金子「……あの、どなたですか？」

優奈「隣に住んでる、三島です」

金子「はあ……で、なんの用です？」

優奈「さつきから、うるさいんですけど！今何時だと思ってるの？」

金子、扉を閉めようとするが、優奈に押しさえられ、閉められない。

優奈「ちよっと！まだ話してる途中でしょ？」

信じらんない！」

金子「あんた、最近夜になるとずっと喚いてた女だろ？」

優奈「それは……」

金子「うるさい？こつちが言いたいよ」

金子、再び扉を閉める。苛立ったまま、

水を飲んで落ち着こうとすると、外から何か聞えてくる。泣き声だ。

金子「……うるさいな！」

金子、扉を開くと、優奈が扉の前に立ち、泣き崩れている。

金子「……はあ？」

優奈「ごめんさい。私こうなんです」

金子「(焦る)こうなんですって、どうなんなのか、ちよっと俺わかんない」

優奈「オーディション近くなると、自分のこと、抑えられなくなっちゃって……」

金子「何言っつかわかんないけど、とりあえず、うちの前で泣くのやめて？」

金子、周囲に目をやると、アパート内の住人たちが、それぞれの部屋から、顔を出し、こちらを見ている。金子、顔を顰め、優奈を部屋の中に無理矢理入れる。

× × ×

泣きやんだ優奈、地べたに座り、金子の部屋を見回す。

優奈「……ミニマリスト？」

金子「違うよ」

優奈「その割には万年床なんですわ」

金子「泣きやんだなら帰れよ」

優奈「冷たいなあ。もうちよい話聞いてくれたっていいじゃん、乗りかかった船で」

金子「図々しい……」

優奈「別に、誰か来るわけじゃないんでしょ？」

金子、布団の、すこしだけ盛り上がった部分に視線を向ける。

優奈「もしかして、誰か一緒に住んでるか？」

金子「住んでない」

優奈「だよー。こんな部屋に」

金子「……なんでもいいけど、これに懲りたら、もう夜中にあんな声出すのはやめろ」

優奈「でも、そういう役だから」

金子「どういう役だよ」

優奈「えつとね、チャラくてエロくて、お金も甲斐性もない酷い男に、ボロ雑巾のようにヤリ捨てされる女の子の役」

金子「……」

優奈「あ、そうだ。今ここでやるんで、見ててくださいよ」

金子「は？いやいいよ、俺ドラマとか映画とか見ないし、演技のことなんて全然……」

優奈「そういう人の意見こそ案外参考になりたりするもんなんで」

金子「あんたなあ……」

優奈「あ、キツカケてください」

金子「戸惑いながら……よーい、ハイ」

優奈、突如スイッチが入り、その場で床に這い、見えない何かにすがりだす。

優奈「(絶叫)行かないで……私、あなたがいなかったら、生きていけないのぉ！」

金子、その優奈の演技を、ただ見つめる。

× × ×

布団の中。暗闇の中に、真理恵の瞳の入った瓶がある。布団の外から、優奈の泣き叫ぶ声が聞こえる。

○金ぴか亭(十四年前)

人の気配がしないシャッターの前で立ち尽くす真理恵。

観念し、帰ろうと歩きだすと、中から大きな物音が聞こえる。

真理恵、慌てて引き返し、シャッターをガンガンと叩きだす。

真理恵「いるんでしょ……悟君、ねえ、開けて、お願いだから……」

しかし、何の反応もない。

真理恵、やがてシャッターを叩くのをやめ、今度こそその場を後にする。

○産婦人病院・前(十四年前)

真理恵、建物から出てくる。門の前では、若き日の恵美と外岡が待ち構えている。

恵美、やってきた真理恵を抱きしめる。

恵美「真理恵、辛かったね」

真理恵(笑顔を作り)「大げさだよー」

恵美「そういうところで強がるの、よくないよ」

真理恵「私は大丈夫だって」

真理恵、恵美に抱かれながら、よそ見をする。腹が大きくなった妊婦が、旦那と一緒に会話をしながら出てくる。真理恵、それに見入る。

■金子の部屋(夜)

優奈、息を切らし、金子を見つめる。

優奈「……どうだった？」

金子「ああ……」

優奈「ああ、じゃなくて。ちゃんと見た？なんかあるでしょ、主がいいところ、はい」

金子「……眼が、まつすぐだ」

優奈「なにそれ、照れんじゃん」

金子「……」

優奈「まあ、ありがとう……またよかったら、見てよ。私の芝居」

優奈、部屋から出ていく。

しばらく呆然とした金子、やがて立ち上がり、布団をまくり、真理恵の瞳の入った瓶を拾い上げる。

金子、瓶を床に叩きつけようと振りかぶるが、できず、その場に蹲る。

金子「言ってくれ……俺はどうしたらいい？」

金子、真理恵の瞳に尋ねるが、何も反応はない。

■轍の部屋・物置

丸岡、骨をサイズの大きなやすりでひたすら削っている。

金子もやすりと骨を持っているが、手は動いていない。

丸岡「息があがりながら）……金子さんあの、わかったんですけど、骨もそうなんですけど、肉も残しておきましたよね、我々」

金子「残しましたね」
丸岡「あの、あれはどこへ行ったんですか」
金子「ああまあ、もう出荷されたと思うけど」
丸岡「出荷……何の？」

と、そこに轍と崎山が入ってくる。轍、手にお茶の入ったグラスを持っている。
轍「ハイお疲れちゃーん。やってる？」

丸岡「あ、社長、こんにちは！」
轍「おう丸ちゃん、やってる？」

丸岡「はい、あの、社長に薦めてもらったあの野菜ジュース、飲んでますよお」

轍「あ、あれいいでしょ？苦味ないけど、糖質ゼロなのよ。俺ね、今これハマってるの」

丸岡「なんですか、それ」

轍「ルイボスティー。知らない？」

丸岡「はい、今始めて知りましたそれ」

轍「これ飲んでから、冷え症がだいぶよくなったのよ」

丸岡「へえー。私もやってみようかな」

崎山「シャブ中が、健康に目覚めてどうんだよ……おうい金子お前さつきから手え、止まりっぱなしじゃね？」

金子、轍の顔を見つめている。

轍「ん？どうしたの金子ちゃん。俺の顔に何かついてるか？」

金子「……この仕事は、どこから引き受けたものなんですか？」

崎山「おい金子お」

轍、崎山を手で制す。

轍「なに、急に。今までそんなこと気にしたことないじゃん」

金子「いえ、そういうあれじゃ……」

轍「じゃあ、どういうアレなの？」

金子「(焦り)あの、今まで聞いたことないの、意外と聞いたら教えてくれんじやないかなんて、思ってみたり……」

轍「そんなわけないでしょ」

崎山「やっぱお前、死体のマンコ見て興奮してたんだろ？え？やりたかったんだろ」

轍「依頼人には信用第一でやってんの。いちいち教えてたら、こんな商売成り立たないのよ。わかるでしょ？」

崎山「いい加減わかれよこの野郎」

轍「……もう十年ぐらいになるかな。君の親

父さんが俺のところに来てきて、店を再建したいって相談してきてからさ、そっからの付き合いじゃない……まあ、店こそうまくいかなかったけども。そんなに長いことやってきて、未だにそんなことも共有できてないようじゃさ、悲しいよ、俺」

崎山、長めの骨を一本拾いあげる。

轍「おい、なるべく丸っこいやつ選んでやれよ。久々なんだし」

崎山「ジジイ、今日はもう休んでいいぞ」

丸岡「え？いいんですか？」

崎山「あとはこいつにやらせつから、シャブでもなんでもやってるよ」

丸岡「はあ、じゃお言葉に甘えて……」

丸岡、自分の鞆から白い粉を取り出す。

崎山、部屋にある棚の引き出しを開け、コンドームとローションを取り出す。長い骨にコンドームを被せながら、金子にじり寄る。

崎山「そんなに死体とやりてえなら、やらせてやるよ。脱げ」

金子、固まっていると、崎山が骨で金子の顔を殴る。

崎山「脱げつつたらさっさと脱げよ！」

崎山、金子のズボンを脱がそうとする。

金子、抵抗するが、あっさり脱がされる。下半身が丸出しになる金子。

崎山、コンドームの被さった骨にローションを塗りたいく、それを金子の尻の中に挿入する。苦悶に顔を歪ませる金子。

丸岡、スプーンの上に覚醒剤の溶液を作りながら、その光景を見ている。

轍「うえー気持ち悪い！」

崎山「ほら、さっさと削れ！俺がいいって言うまで、抜くんじゃねえぞ！」

金子、痛みをこらえながら、崎山の言われるがままに骨をやすりで削る。骨が粉に変わっていく。

轍と崎山、金子を見ながらゲラゲラ笑っている。丸岡は、注射を打ちながら恍惚の表情を浮かべる。

■特急列車・内

車内に乗り込む金子。

席に座ろうとするが、座る際に苦痛が走り、そろそろと座る。

■日向家・仏間

金子、正座をし、気だるげに胡坐をかく

日向健介(65)と向き合っている。

日向美佐(63)が、二人に淹れた茶を置く。

金子「ありがとうございます……」

美佐「わざわざ東京から、悪いわねえ」

健介「……で、何？同窓会だっけ？」

金子「はい、まあ」

健介「やめとけやめとけ、あんな辛気臭い女来たって、つまんねえだけだろ」

美佐「お父さん、折角お友達が東京から来てくれたのにそんな態度……」

健介「うるせえな、俺はあいつとは縁切ったつってんだろ！」

健介、茶を飲む。

健介「まずい」

美佐「え？おかしいわね、いつも通り淹れたハズなんだけど……」

健介「茶っ葉、変えろって言ったろ。」

健介、湯呑みを美佐に差し出す。

健介「変えろ、今」

美佐「変えろって言われても、あれしかないんですけど……」

健介「買ってくりやいいじゃねえかよ」

美佐「……はい」

美佐、湯呑みを受け取り、部屋を出る。

健介「東京東京うるせえんだよ。あいつも、東京出して、真面目にやっているとと思ったら、ロクでもねえ男に引っ掛かって、子供作って、そいつを墮ろしたときたもんだ」

金子「……」

健介「人殺しだよ、あいつは」

金子、気まずそうに俯く。

■日向家近く・畦道

金子、歩いていると、後ろから足音が聞こえてくる。振り返ると、美佐がこちらに向かって走ってくる。

美佐「(息を切らし)待って！……よかった、間に合った。まさかこんなに早く帰っちゃうなんて思ってた……」

金子「……どうしました？」

美佐「あの、コレ……」

美佐、金子に一枚の葉書を渡す。真理恵が、成人男性・仁科新吾と、五歳ぐらいの子供・仁科姿とともに、仲よさげに写真に写り、「今年、結婚します」と手書きで書かれている。

金子「これ……」

美佐「一度だけ、あの子から年賀状来たの。子供のことであってから、五年ぐらい経った頃かな。そのあと、また連絡来なくなっちゃったけど」

金子「お母さんは、そのあと、連絡とったり会いにいかなかったんですか？」

美佐「私はホラ……お父さんが、怒るから、返事も結局出せなかったし」

金子「ああ……」

美佐「これ、あげる」

金子「……いいんですか？これしかないんでしょう？」

美佐「いいの。あの家でコレ隠しておくの、もうツラくなってきたし……」

金子、葉書を受け取る。

美佐「今日は、本当にありがとうね、時間が経つても、離れても、声をかけてくれる友

達がいてくれるなんて、あの子も幸せね」
金子「……」

美佐「(ニコリと笑い)そう……いけない、早く戻らなきゃ、怒られちゃう。それじゃ金子さん、真理恵に会ったら、よろしくね」
金子、頭を下げ、足早に去っていく。その後ろ姿を見送る金子。

金子、写真に目を落とす。笑う真理恵のその目に見入る。

○保育園・校庭(夕方・十年前)

仁科姿(4)が、一人サッカーボールに壁打ちをして遊んでいる。

と、ボールがイレギュラーで、コースが大きく逸れ、転がっていく。その先に、

真理恵(6)が立っている。

真理恵「まだ来ないねー」

姿「きませんなあ」

真理恵、姿にパスをする。二人、パス回しをしながら、会話を続ける。

真理恵「姿君は、将来サッカー選手とかになりたっかりする？」

姿「サッカーせんしゅ?いいね、考えとく」

真理恵「今日は、お父さん?お母さん?どっちが来るのかなあ?」

姿「お父さんかな。ていうか、お母さんはこない、かな?」

真理恵「え、なんで?」

姿「こないんだって。お父さんが言った」

真理恵「……」

姿「先生は?」

真理恵「え?私?」

姿「いかないの?おむかえ」

真理恵、パスを受け取り損ねる。ボールを追わず、その場に立ち尽くす。

姿「先生?」

真理恵「ごめんね……」

真理恵、近づいてきた姿の頭を、鳴きながら撫で続ける。

と、仁科新吾(6)が慌ててやってくる。

仁科「ごめんなさい、遅くなりました!仕事
が長引いて……」

仁科、二人の元に駆け寄る。ふと真理恵の顔を見ると、真理恵が泣いている。

仁科「……え、先生、どうしたんですか?」

姿「お父さん、先生なかしちゃダメだよ」

仁科「いやいやいや、俺か?……俺ですか?」

仁科、おろおろしながら、泣き続ける真理恵に、慌ててハンカチを差し出す。

× × ×

すっかり日が暮れている。

仁科、眠った姿を抱きかかえ、泣きやんだ真理恵に寄り添っている。

仁科「落ち着きました?」

真理恵「ごめんなさい、姿君も寝ちゃったのに、付き合わせちゃって」

仁科「いやあ、いいんです。どうせ、帰っても俺と姿以外には家にいないんですし」

真理恵「ああ……」

仁科「大丈夫ですよ、そんな困らなくても」

こっちはもう、整理ができたんで」

真理恵「……強いですね、仁科さん」

仁科、姿を抱いたまま、立ち上がる。

仁科「じゃあ、そろそろ失礼します」

真理恵「ありがとうございます」

仁科「いえいえ。先生も、整理がいたら、是非僕に話してくださいね」

仁科、一礼し、姿を抱いたまま去る。

真理恵、仁科を見送っていると、姿が目
を覚ます。姿、寝ぼけ眼で、真理恵に手
を振る。真理恵も手を振り返す。

■金子の部屋(夜)

金子、真理恵の写真の付いた葉書を眺め
ているうち、表情が険しくなっていく。

瓶に入った真理恵の瞳を、写真に向ける。

金子「(瞳に)何がそんなに嬉しいんだ、おい」

と、そこに扉が急に開き、鍋を持った優
奈が部屋に入ってくる。金子、慌てて瞳
と葉書を布団の下に隠す。

金子「勝手に入ってくるなよ！」

優奈「何、エロ本でも読んでた？」

金子「読んでねえよ」

優奈「ホラ、金子さん、どうせロクなもん食ってなくてかわいそうだから、慈悲深い私
が料理、作ってきてあげたよ！」

優奈、鍋の蓋を開ける。中にはロールキ
ャベツが入っている。

金子「……いいよ、別に。食欲ないし」

優奈「いいから、ホラ。私にもお礼とかお詫
びとか、いろいろ都合があるんだから」

優奈、フォークでロールキャベツを刺し、
金子の前に突き出す。

金子、押しに負け、渋々ロールキャベツ
を口に入れる。すぐに、顔が歪む。

金子「……辛い」

優奈「え？ウソ！ウソだよ」

優奈、自分もロールキャベツ食べる。顔
を歪め、流し台に食べたものを吐き出す。

× × ×

布団の中、暗い中に真理恵の瞳の入った
瓶と、葉書がある。

布団の隙間から、金子と優奈のジタバタ
する足元が見える。

金子(声)「あんたこれちゃんと味見たか？」
優奈(声)「してない……必要性を、感じな
かったから」

金子(声)「必要性をあんたが判断するなよ！
みんなちゃんとやってるんだから！」

隙間から、真理恵の瞳と写真に光が差す。

○仁科の家・台所(七年前)

真理恵、海老の背わたを手際良く抜いて
いく。その傍で、仁科がひき肉をこねて
いる。姿はうろろうろしながら、並ぶ食材
を眺めている。

仁科「先生、うまいですねえ。どこかでやっ
てたとか？」

真理恵「はい。教わったんです……友達に」

仁科「姿、楽しみだなあ。先生の手料理」

姿「おう！」

真理恵「そんな、大したもんじゃないよ」

○仁科の家・リビング

姿の前に、出来あがったエビフライとハ
ンバーグのプレートが並べられている。

姿「料理を見て」すげえ」

真理恵「すごくないよ」

姿「ハンバーグと、エビフライがいつしよに
並ぶ時代がこれのおれにくるとは……」

仁科「先生のおかげだぞ。姿今日で卒園だか
らって、わざわざこうして、な」

姿「とくべつ！」

真理恵「そう、今日は特別。さ、遠慮しない
で食べて」

姿「いただきます！」

姿、エビフライを食べる。

姿「おいしい！」

真理恵、姿の顔に見入り、微笑む。

× × ×

食べ終えた食器を片づける真理恵と仁科。
テーブルでは、姿が突っ伏して寝ている。

仁科「姿のやつ……あんなに食ってすぐ寝た
ら、ブタになっちゃうぞ」

真理恵「はしやぎ疲れかな」

仁科「寂しさの裏返しじゃないかな。今日で
先生と会えなくなっちゃうから」

真理恵「本当に」

真理恵、食器をしまい終え、通りがかつ
た姿の頭を撫でる。

真理恵「姿君、お布団行こ……仁科さん、一
緒に寝室まで運んで」もらえますか？」

仁科「……」

真理恵「仁科さん？」

仁科「本当に、今日で最後なんでしょうか？」
真理恵「え？」

仁科「会えなくなるのは、あくまで保育園と
いう、公の話であって、個人と個人の
話となると、また別の話ではないかと……」

真理恵「別……ですよね」

仁科「先生、今日だけ特別だなんて言わず、これからもうちで、姿に料理を作ってもらえませんか？」

真理恵「……」

仁科「急な話と思うかもしれませんが、僕は本気です。きつと、姿の奴だって……」

姿「うん……」

真理恵と仁科、ハッと姿の方を向く。すがたが、寝たまま。どうやら寝言らしい。

仁科「ビックリした……起きちゃったのかと」

真理恵「はい……」

仁科「ねえ……え？」

真理恵「よろしく願います」

仁科と真理恵、顔を見合せて笑う。

○遊園地(七年前)

真理恵、通りがかりの遊園地の来場客に声をかける。

真理恵「すいません、写真。撮ってもらっていいですか？」

客「あ、はい、いいですよ」

真理恵、カメラを客に渡し、真理恵と姿がいる場所に戻る。

姿「ほら、先生、早く早く」

真理恵「わかったよー」

真理恵、仁科と姿と一緒に並ぶ。

客「いきますよー。はいチーズ」

写真を撮られる三人。この写真が、あの年賀状に添えられていたものだ。

■三島優奈の部屋(夜)

ゴミ袋や、演劇についての本が散乱した部屋の中。

金子、台所で、鍋に入ったロールキャベツを皿の上に移す。

金子「あんた……こんな部屋で、人に作る料理作ってたのかよ」

優奈「言っとくけど、有機物はないから。ほとんど無機物ばっかだから」

金子「……この部屋、入ってからずっと、腐

った玉葱みたいな臭いがすんだけど」

優奈「気のせいじゃない？」

金子、顔を顰めながら、鍋に残ったスープを味見する。そして、冷蔵庫や炊飯器の中を覗く。

× × ×

金子、優奈の前に、リゾットの入った皿を置く。優奈、料理を食べる。

優奈「……うまつ。なにコレ、どうやったの？」

金子「大したことしてないけど、ひとつアドバイスするとしたら、余計なことするな。

マニユアルに書いてあることを一言一句ずらさずに作れば、人間の食うもんは作れる」

優奈「やつぱり、昔なんかやってたんでしょ」

金子「……帰る」

優奈「えっ、食べないの？」

金子「だから俺はいいって。ロールキャベツの本体は、無理矢理食うなり捨てるなり、勝手にしてくれ」

金子、立ち上がり、扉の方に歩き出す。

優奈「また来てね」

金子「(足が止まる)……」

優奈「したら、また作ってよ。なんか」

金子「俺が作るのかよ……」

金子、思わず微笑む。優奈にその顔を向けないまま、部屋をあとにする。

■廃墟

燃えた建築物の跡地。

焼け落ちた廃材を、ひらすら運ぶ労働者たち。その中に、丸岡が混じっている。

■飯場

プレハブ小屋の前に、炊き出しが来ている。米やみそ汁と共に、甘ダレに漬けた肉団子が振る舞われている。

労働者たち、よそわれた料理をすごい勢いで平らげていく。

労働者①「……まじい肉だなあ」

労働者②「な。しょうがとかネギとかすげえ

混ぜて香り誤魔化してる上に、タレまでぶっかけて元の味なんかわかりやしねえ」

労働者③「ま、肉は肉だべ。力つけねえて、午後もたねえぞ。今日は長丁場だ」

その中にいる丸岡、肉団子を見て、箸が止まる。

■住宅街く仁科家・前

仁科、真理恵の年賀状を片手に、歩きまわっている。

そのうち、一軒の家の前に辿りつく。大きな一軒家。

その家の表札には、「仁科」と書かれている。金子、躊躇いつつも、チャイムを押す。だが、誰も出ない。何度押しても反応がなく、仕方なく金子、扉に寄り掛かり、その場に座りこむ。

× × ×

やがて、日が暮れる。金子、疲れでうとうとしていると、「ちよっとー」という声に起こされる。顔を上げると、そこには

仁科(49)と、臼井亜美(24)が立っている。

仁科「あなた、ここで何してるんですか？人んちの前に何時間も座り込んでるって、近隣の方からも苦情が来てるんです」

金子「待った……あなた、仁科さんだろ？あなたに用があつて来たんだ」

仁科「私はないです。さつさと帰って」

金子「待って(年賀状を取り出し)、ほらこれ、あんただろ？」

仁科、年賀状を見て、表情が変わる。

金子「この隣にいる、日向真理恵について話が聞きたい！」

臼井「……社長、大丈夫ですか？警察呼びましょうか？」

仁科、臼井を手で制す。

仁科「……わかりました。ここで話すのもなんなんで、お入りください」

金子、目の前の仁科と、年賀状の写真の中で真理恵とともに笑う仁科の顔を見比

べる。目つきが鋭く変化する。

■仁科家・リビング(夕)

仁科、用意された高級そうなソファに、落ち着かない様子で座っている。その向かいに座る仁科、金子に名刺を差し出す。

仁科「私一応こういうことをしています」

名刺には「株仁科エージェンシー代表取締役・仁科新吾」と書かれている。

仁科「まあ、芸能事務所っていつても、売れないグラビアアイドルしかいない二流三流の事務所です。今日もタレントが一人、現場からトンズラしちゃって。ま、なんとか代役見つかって事無きを得たんですけど」

金子「はあ……」

仁科「彼女と会っていた頃は、まだ前の会社にいた頃ですね……で、なんでしたっけ？同窓会？」

金子「はい」

仁科「で、金子さんは？真理恵の……友達？」

金子「……はい、友達、です」

仁科「そう……でも、役に立つような情報はないと思うけどな」

金子「何でもいいんです、もしかしたら小さくても手がかりになるような情報があるかもしれないし」

仁科「手がかりって、物騒だな……私とその女性が交際していたのはもう十年以上前で、確かにそこに書かれている通り、婚約していましたが、籍を入れる前にまあその破談となりました。その後は一切、一度たりとも連絡をとっていないんですよ」

金子「何故、ダメになったんです」

仁科「それ、そこまで話す必要ありますか？男のことですよ？」

金子「……」

仁科「ま、あえて言うとしたら、その頃のこととはあまりいい思い出はないですね」

金子「だから、それを話してくださいって」

仁科「……お言葉ですが、あなたさつきから、

ちよつと無神経じゃないか？」

その時、部屋の外から、どたどたと足音が聞こえ、通り過ぎる。一瞬にして、仁科の顔が険しくなる。

仁科「(部屋の外)……おい、姿！学校から電話あったぞ。お前、今日も学校行ってないだつてな」

だが、なんの返答もない。仁科、怒りからその場で「くそっ」とか「畜生！」とか叫ぶ。呆気にとられる金子。

金子「……今帰ってきたのは、この子ですか？」

仁科、年賀状に写る子供の姿を差す。

仁科「だから、関係ないでしょ、あなたに」

金子「……」

仁科「……そうそう、酷い話があつてさ」

金子「……酷い話？」

仁科「ま、一応婚約まで行ったのをナシにするわけだから、それなりに条件や義務みたいなことも発生するワケだけど。別れを切り出したのはアイツだよ？だがアイツは、何を血迷ったのか、姿を寄越せって言いだしてきてさあ」

■仁科家・姿の部屋(夕)

部屋は薄暗く、中はよく見えないが、その中に仁科姿(も)は確かにいる。外から仁科の努号が聞こえてくる。

仁科(声)「アイツが産んだ子でも、母親でもなんでもないのに血のつながらない子供くれだつてよ！頭おかしいよな！」

■仁科家・リビング

金子、仁科を睨んでいるが、仁科、構わず話を続ける。

仁科「そもそも婚約が消滅したのも、あいつの頭がイカれたからだよ。何かっていえばよくわからんことをギヤアギヤアギヤアギヤア……男の仕事に口出ししやがって」

金子、思わず仁科に殴りかかる。

金子「そんな風に言うのはやめろ！」

だが金子、仁科に腕をとられ、すぐにねじ伏せられる。身動きがとれない金子。臼井が、慌てて部屋に入ってくる。

臼井「社長、警察呼びますか？」

仁科「いや、やめてくれ」

仁科、金子を放す。金子、やり返さず、その場にぐったりしている。

仁科「お帰りください」

金子、黙って出口に歩き出す。

仁科「あ、真理恵に会ったら、よろしく言つてよ、じゃあね」

金子「……会えるもんならな」

仁科、金子の言葉にハッと振り返る。金子、構わず部屋を出ていく。

■仁科家・書斎

仁科、カーテンを開く。窓から、腕を押しさえて帰っていく金子の姿が見える。

仁科、カメラを取り出し、金子の顔にズームして写真を撮る。

■金子の部屋(夜)

金子、部屋の真ん中に座り、前に置いた真理恵の瞳の瓶をたじっと見つめる。

と、部屋の扉が急に開く。優奈だ。金子、咄嗟に真理恵の瞳を自分の後ろに隠す。

金子「だから勝手に開けるなつて言ってるだろ！メシは……もうちょい待ってる」

優奈(声)「違うの……」

優奈、急に金子に向かつてきて、すがるように抱きつく。

優奈(声)「もうやだ……」

金子「焦りながら)わかったから、えっと、とりあえず……靴を脱いでくれ」

優奈(声)「うん……ごめんさい」

優奈、金子の指示で玄関に振り返る。金子、その一瞬で真理恵の瞳を自分の押し入れにぶち込み、しつかりと襖を閉める。優奈、靴を脱ぎ、再び部屋に上がってく

る。金子の行動に気付いていない。

× × ×

金子「で？」

優奈(声)「まあ早い話が、落ちたんですわ」

金子「またか」

優奈「そう、まだだよ。いつものことだからダメなんだ……」

金子「で、やめんのか？」

優奈「ずっと決めてたんだ、これがダメだったら、もう終わりにするって」

金子「まあ、あんたがそう言うなら……で、これからどうする？」

優奈「さあ。とりあえずここは出ようかな。

東京、元からあんまり好きくなかったんだよね、次はあんまり人のいないところがいいかな。遠く……なんなら、外国とかでも」

金子「そうか……」

優奈「そうだ、金子さんも、一緒に行く？」

金子「……」

優奈「なーんて！金子さん、冗談言ってもムツツリしてんだもん……じゃあ、私そろそろ帰るね！引越しまつたらまた教える」

優奈、立ち上がり、部屋から出ていこうとする。金子、優奈の手を急に後ろから掴む。驚く優奈。

優奈「……金子さん？」

金子「それもいいかもな」

優奈「なんか金子さん、違う。いや、悪い意味じゃなくてさ、最初に会った時は、なんかもつと、死んでるみたいな人だったから」

金子「……今は、生きてるのか？俺」

優奈「うん」

優奈、頷く。そのまま、見つめあう二人。

■仁科の家・書斎(夜)

不安そうに、電話をかける仁科。

仁科「どうなってるんです？そいつ彼女のことを知ってるだけじゃない……この世にいないことも知ってる、おそらく」

仁科の前にあるパソコンには、金子の写

真が映っている。

■優奈の部屋(夜)

半裸になり、口づけあう金子と優奈。

金子「(口を放し)……あの、俺久々なんだ」

優奈「そんなの、いちいち言わなくていいよ」

金子、ふと自分の横に目をやる。襦が、少し開いている。金子の動き、止まる。

優奈「どうかした？」

金子「いや……」

優奈「あ、そうだ。ある？アレ……」

金子「いや、持ってない……」

優奈「じゃ、とつてくる。部屋にあるから」

金子「そのままで？」

優奈「見つからなきゃ、大丈夫」

優奈、ドアを少し開け、部屋の周囲を確認してから、出ていく。

金子、手を伸ばし、襦を閉める。

すぐに優奈が部屋に戻ってくる。

優奈「(コンドームを見せ)あったよ」

金子「ありがとう……」

優奈「つけてあげよっか？」

金子「え？」

優奈「自分でつける？」

金子「あ、いや……」

優奈「つけてほしいんだ？」

金子、照れながら、頷く。優奈、にやにやしながら、金子のパンツを脱がす。

金子の顔、思わず綻ぶ。

優奈がコンドームの封を切っている間、

金子、再び襦の方に目をやる。

襦、また開いている。

金子「閉めたはずだろ……」

優奈「なんか言った？」

金子の顔が、一瞬にして蒼ざめる。

優奈「あれ？萎んだ……」

金子、襦の奥、真っ暗な押し入れから目を放すことができない。

その時、奥が一瞬キラリと光る。

優奈「どうしたの？緊張してる？」

金子「何で逃がしてれない……」

優奈「……え？」

と、その時、ドアが乱暴にノックされる。

優奈「こんなに遅くに……出なくていいの？」

金子、窓の外を見る。

下に宅配業者のトラックが止まっており、その周りに作業着を着た二人の男が煙草を吸ってタムロしている。金子、轍のマンションにいた男たちと同じだと気付く。ドアが蹴破られ、崎山が部屋にはいつてくる。悲鳴をあげる優奈。

崎山「よう、ノックしたら出るよ」

金子「すみません……」

優奈「誰？」

崎山「つたく、こんな時間に呼び出しだよ。

新しい仕事だつてさ」

金子「俺も来いつてことですか？」

崎山「いや、大丈夫。だって、今日はお前が

仕事される側だから」

崎山、金子を捕らえ、腕で首を固める。

崎山「……オレ日本語おかしいか？姉ちゃん」

優奈「あんた誰？何してんの？やめてよ！」

優奈、二人を止めようとするが、崎山が

優奈の腹を蹴る。優奈、押し入れまで吹

っ飛ばす。その際、襖が外れる。

崎山「おめー、なんかいろいろ臭ぎまわつて

るらしいじゃねえか」

金子、抵抗するが、崎山に効かない。

崎山「ま、いいや。仕事入った時、ちよー嬉

しかったよ、ようやくお前のこと、殺して

いいんだつて」

優奈、怯えたまま、逃げようとするが、

立ち上がろうとした際、自分の足元に、

何かある事に気付く。真理恵の瞳だ。優

奈、それを見て悲鳴をあげる。

と、部屋に宅配業者の二人が入ってくる。

優奈、二人によって取り押さえられる。

金子、落ちそうになっている。

崎山「それに比べてお前は(真理恵の瞳に目をやり)……それ、あの女のか？跡形もなく消

し去れつて話だったじゃねえか……おい、それ、潰しといて」

宅配業者①「あ、はーい」

宅配業者の一人、真理恵の瞳に手を伸ばす。金子、朦朧としながら、その様子が目に入る。

金子「……それに触るなあ！」

金子、急に力が入り、崎山から離れようとする。押さえつけようとする崎山ともみ合いになり、ベランダの窓ガラスに激突する二人。飛び散るガラスの破片。

崎山が金子にマウントをとる格好となり、

崎山、金子の首を絞める。

金子、咄嗟に手を伸ばし、触れた大きな

破片を拾い上げ、首筋に突き刺す。

崎山の首から、血が吹き出て、その場に

倒れる。体を震わせながらのたうちまわ

り、やがて絶命する。金子、返り血を浴

びながら、宅配業者の二人を睨む。

金子「それを放せ」

宅配業者②「(焦り)来るな！女を殺すぞ」

宅配業者②、ナイフを取り出し、優奈に

向ける。声も出さず怯える優奈。

金子、二人にじりよる。

宅配業者②「本気だぞ！」

宅配業者②、刃を優奈の腹に食い込ませ

る。悲痛な呻き声を上げる優奈。だが、

金子は少しも怯まない。その様に怯えた

宅配業者②、優奈を放し、逃げようとする

が。金子、宅配業者②を後ろから捕ら

え、ガラスの破片で首をかき切る。金子、

瞳を持ったままの宅配業者①の方に向く。

宅配業者、慌てて真理恵の瞳を床に置く。

宅配業者①「(怯え)ほら置いた、置いたから」

金子「脱げ」

宅配業者①「え？」

金子「早く。その制服だけでいいから」

宅配業者①「脱いだら、殺さない？」

金子「ああ、殺さない殺さないから。汚さな
いようにな」

宅配業者、慌てて制服を脱ぎ、金子に差し出す。

金子「ありがと……そうだ、あの下に停めてあるトラックは、使っていない？」

宅配業者①「……トラックはちよっと」

金子「そう」

金子、宅配業者①の首をかき切る。宅配業者と崎山の三人、全員絶命する。

優奈「いやあ！来ないで……」

金子「あんた、俺に言ったよな……生きてるみたいだって、俺」

金子、真理恵の瞳を拾い上げ、優奈に見せつける。

金子「……こいつが俺に聞いてくるんだ。あの頃のように生きてる？って」

優奈「何、言ってるの？」

金子「こいつが、俺を逃がしてくれないんだ……だからすまない、俺は行けない」

優奈「……」

金子「あと、俺が言える義理じゃないかもしれないけど……続けるよ、芝居」

優奈「来るな！あんたの言ってること、一つもわかんないんだよ！人殺し！」

優奈、立ち上がり、部屋から逃げていく。部屋に残された金子、立ちあがり、体に附着した血を、洗面台で洗いだす。

× × ×

宅配業者の服を着た金子、真理恵の瞳をポケット手に取り、見つめ、ポケットの中に入れる。

■轍の部屋・リビング(夜)

轍、腕立て伏せをしている。すると、チャイムが鳴る。

轍「……お、来たな」

轍、運動をやめ、玄関に向かう。

■轍の部屋・玄関

金子、扉を開ける。

宅配業者の制服を着て帽子を目深に被っ

た男が、台車に積まれた大きな段ボールとともに立っている。

轍「お疲れ。意外と早かったじゃん」

男、台車を転がし、段ボールを部屋の中に入れる。

轍「実はさ、なかなかない事態だから実は内心ちよっと焦ってたけど、ホッとしたよ」

轍、段ボールに触れ、揺らそうとするが、

轍「……なんか、いつもより重くないか？」

轍、段ボールを開け出す。

段ボールの中には、三人分のバラバラ死体が、雑に詰め込まれている。

轍の顔、一瞬にして蒼ざめる。宅配業者の男の顔を覗くと、金子だった。金子の手には、包丁が握られている。

金子、扉を閉め、轍に掴みかかる。

もみ合いになる二人。だが、轍のほうが力が強く、包丁が轍まで届かせられない。

と、そこに廊下の物置部屋の扉から、カラーボックスを抱えた、全裸の丸岡が出てくる。もみ合う二人を見て、固まる。

丸岡「ええ……」

轍「ちよっとよかった、早くこいつ、殺して」

金子「丸岡さん、チャンスだ！」

丸岡「え？」

金子「ここで逃げて、あんたはあんたの好きなように生きればいい」

丸岡「……」

轍「そんなことより、丸岡さん、こいつ殺したら、あなたの好きなホラ、お菓。もう、好き放題あげるから。一生分」

丸岡「一生分？」

轍「ね？ほら、だから早く！」

金子「丸岡さん！」

丸岡「私は、社長に随分お世話になりました。こんな私によくしてくれて、仕事もくれて、おまけに一生分のシャブの世話まで」

轍「そう、それでしょ？丸岡さんならわかってくれると思ってたよ」

金子、カラーボックスからナタを取り出

し、二人に向ける。

金子「やめる……」

轍「ほら、殺せ！」

丸岡「社長は、私の憧れです……だから、これからは社長を見習って、健康的に生きていこうと思っています」

轍「うん、わかったから、早く」

丸岡「私もオーガニックに生きます……」

金子「ん？」

轍「……なんかおかしくない？」

丸岡「シャブももう、やめます」

丸岡、ナタを轍に向け、振りかぶる。

轍「……おい、何考えてんだよ。いいから俺に従えよジジイ、今更お前みたいなヤク中が、健康なんか考えてんじゃねえよ！」

丸岡「今まで、ありがとございまして！」

轍「……やめろお！」

■マンション前・道路

顔が血塗れの丸岡、野菜ジュースを飲みながら歩いている。

すれ違う人々、丸岡の顔を見てぎよっとするが、丸岡は全く気にしない。

■轍の家・キッチン(夜)

金子、冷蔵庫を漁っている。

「高そうな野菜たちを雑に切り刻み、オリーブオイルを尋常じゃない量ぶっかける。

■轍の家・リビング

暗い部屋を、受け皿なく直に置かれたキヤンドルだけが照らしている。

手足を縛られ、蹲る轍。腹には、ナタが刺さっている。

金子、油ベチョベチョでまずそうな野菜炒めを手を持ち、部屋に入ってくる。油を所々にこぼしながら、野菜炒めを轍の前に置く。

轍「自慢のカーペットなんだ。あんまり汚さないですよ……」

金子「いいから食えよ」

轍「……」

金子「足りないか？油」

金子、野菜炒めに、更にオリーブオイルをぶっかける。

轍「食えるか、こんなの(瀕死)……なあ金子ちゃん。無益な殺し合いは辞めよう？俺の新しいパートナーにならねえか？崎山が死んじゃって、俺も心細いしさ」

金子「まずは、知ってることを話せよ。その他の交渉事はそのあとだ。誰に頼まれて俺を襲った？」

金子、眞理恵の年賀状を轍に見せる。

金子「この男か？」

轍「……そうだよ、お前が女のこと嗅ぎまわるから、俺にクレームが来たんだ」

金子「女の解体を依頼してきたのも？」

轍「ああ」

金子「……何故、この男は女を殺した？」

轍「それは、本当に知らない……」

金子、轍に刺さったナタを左右に動かす。

轍「やめて！空気！空気入っちゃうから！俺は依頼を受けて、処理の手配をただけなんだってば！……ただ、この女が昔仁科の女だったってことは知ってる。昔一度、会ったことはある」

金子「話せ」

轍「仁科とは前から面識があった。十年ぐらい前……奴は当時、芸能事務所にて、まあそういうのと、裏の世界つつうのは切っても切れない関係性みたいのがあって、仁科は会社と裏社会の窓口みたいな仕事をしてた。その時、俺もどさくさに紛れて名刺を交換したよ」

金子、轍の机にある名刺入れをひっくり返す。一枚一枚名刺を探し、その中に少し色の茶けた仁科の名刺が出てくる。

轍「最初は単なる優男だったけど、だんだん染まってくんだよ、みんな。肌の色から心まで、こんがり……それからしばらくは仁

科とも交流があつたけど、丁度社会と裏社会との繋がりにお上が目厳しく光らせた頃で、あいつはそういう関係を一切断つて、それっきりだった」

金子「……」

轍「だが、この間、久しぶりにメールが入った。で、死体の処理をしてくれ、と。でいざやってきたのが、あの女だった。女とは一度だけ、奴の家で顔を合わせたことがある……なんか、気の利かねえ女だったな」

金子「……」

轍「なあ、もういいだろ。もうお前したことも責めねえよ、だからそろそろ、いいだろ」金子「安心しろ、別にあんたを殺す気はない」轍「さすが金子ちゃん、話がわかるじゃない……だからそろそろ、ね？」

金子「え？」

轍「え？じゃなくて……」

金子「殺さないが別に助ける気もない。俺はもう行く。やらなきゃいけないことがある」部屋中のキャンドルが、斜めに傾いている。そして、床中には油。

轍「……さて、せめて、火だけは、ねえ！」

金子「あんたが自分で止めりゃいいだろ」

轍「……」

金子「芋虫レース、だっけ？」

轍「……金子お！」

金子、自分の名前を呼び続ける轍に一切反応せず、部屋を出ていく。轍、床を這い、キャンドルまで近づこうとするが、腹の痛みから思うように動けない。火が、どんどん落ちそうになる。

■配送トラック・内

金子、車を運転している。走りながらカーナビを操作し、履歴の欄を見る。

11月26日付の住所がひとつあったので、それを選択し、案内を開始する。と、対向車線が慌ただしい。消防車数台

が、サイレンを鳴らし、金子の車とすれ違つていく。

■マンション・前(朝)

寂れたマンションの前に、配送トラックが停車する。

■マンション・真理恵の部屋・前(朝)

金子、扉を開け、部屋の中を覗く。部屋の中、もぬけの空。

金子「そりやそうか……」

と、隣の部屋の扉が開き、よしの(51)が扉の隙間から顔を出す。

よしの「あんた、何やってんの？幸ちゃんの客？まさかストーカーじゃないわよね？」

金子「……客？」

■マンション・吉野の部屋(朝)

よしの、スマホから、ソープランド「ルージュマジック」のページを金子に見せる。顔だけ隠された女性の写真の下に「幸さん」という源氏名が書かれている。

よしの「で、うちは、他の店でダメになった女が、流れ流れて辿り着く吹き溜まりで、まあ大概ワケあり。デブにブスにキチガイにサイボーグ。私みたいなババアもね」

金子「はい」

よしの「やだ否定しなさいよそこは、言う程ババアじゃないですよって。ババアだけど」金子「すみません」

よしの「調子狂うな……で、幸ちゃんはコミユニケーションに相当難ありなコとか」

金子「それは……どういった？」

よしの「年はそれなりにいつてるにしても、顔とかはまあまあだから、一見さんには指名が入りやすいんだけど、出てくるお客がほぼ全員、浮かない顔というか、なんか微妙な顔をして帰ってくるの。一応、これも接客業だから、まあ致命的だね。かと言って、

そういう子が普通の仕事できるかといえば
そうでもないし……そんなんだから、親し
い店の子もいなかったみたい」

金子「よしのさんも？」

よしの「私も別に親しいわけじゃないかった
けど……ある日ね」

よしの、急に立ち上がるよしの。金子、
ビククリする。

よしの「私ね、ここで電話してたの。まあ娘
よ。それなりに大人よ。ちよいと所用でね、
まあ恥になるようなことだし多くは言わな
いけど、娘に酷いこと言われちゃって。な
んでこんなこと言われなきゃいけないのっ
て、しくしくしくしく、年甲斐もなく泣い
ちやってたら、ほらここボロいからさあ」

よしの、壁をべしべしと叩く。

よしの「隣の声なんて、もう全部筒抜けだっ
たみたい。幸ちゃんが、隣の部屋から私に
ね、大丈夫ですかって、声を振り絞って、
心配してくれたの。私も心が弱ってから、
つい娘とうまく行っていないこと、喋っちゃ
ったの。そしたらね、彼女……」

真理恵(声)「私にも、子供がいるのー」

金子、急に真理恵の声が聞こえて、ハッ
となる。

よしの「……ってね。ああ、この子、こんな
明るいい声で喋れるのか、って驚いたわー」

金子、部屋の壁をじつと見つめる。

■マンション・真理恵の住んでいた部屋朝

金子、部屋の中に入ってくる。

押し入れを開けたり、ベランダを覗いて
みるが、人のいた形跡は消えている。

金子、急に部屋の中央に寝そべる。

ポケットから、真理恵の瞳の入った瓶を
取り出し、その場に置く。金子、寝そべ
ったまま、それをじつと見つめる。

○轍の家・リビング(夜・七年前)

遊園地で撮った幸せそうな写真が、床に

落ちている。

いかにもないかがわしい男たちが、リビ
ングで酒盛りをしている。そしてその中に
仁科が混じっている。

そんな仁科に、轍が近づいてきて、名刺
を差し出す。

轍「あ、私こういうものです」

仁科「これはこれは、ご丁寧にどうも」

轍「芸能界ってところは、まあ面倒なこともい
ろいろおありですよ。特に人とかはね……
…そういう時お困りの際は、一度私どもの
ほうにハイ」

轍「……ああ、どうも」

仁科、轍の名刺を受け取る。

轍、また別の人間に名刺を私に行く。

仁科「……一体誰だアイツ？いつの間に紛れ
こんだんですかね？」

ヤクザ①「さあ？やたら羽振りがいいみてえ
だけど……」

轍、いろいろなおその場にいる人間に名刺
を配って歩いている。すると、部屋の入
口に姿(7)がいて、酒盛りの光景を不思
議そうに眺めている。

轍、姿に近づく。

轍「こんにちはー」

姿「こんにちは……」

轍「息子さんかな？」

姿「はい……」

轍「何歳？」

姿「七歳です……」

轍「んーいい子だ」

轍、姿の頭を撫でる。

と、そこに真理恵がやってきて、姿を轍
から引き剥がすように手をとる。

真理恵「姿君、そろそろ遅いから寝よっか」

姿「うん……」

轍「あ、奥さんですか？私です……(名刺を
取り出そうとする)」

真理恵、轍に黙礼して、足早にその場を
去る。無然とする轍。

仁科、酒盛りをしながら、その光景を眺めている。

× × ×

酒盛りが終わったあと、散らかった部屋の中を、真理恵が片付けしている。

そこに、ベロベロに酔っ払った仁科が、更にワインを持ったまま現れる。

仁科「何だお前、あの態度は？みんな、俺の大事な仕事相手って、何度言ったらわかる」

真理恵「何考えてるの？姿君、まだ起きてたのよ？あんなとこ見せて……」

仁科「なんだ？いっぱしの母親気どりか？」

仁科、真理恵に持っていたワインを頭からかける。

仁科「お前の子供は、お前が自分で殺しただろ。忘れたのか？」

真理恵「……いつからあなたそんな人になっちゃったの？昔のあなたに戻ってよ」

仁科「お前に、見る目がないだけだろ？」

仁科、ワインボトルを壁に投げつけ、部屋を出ていく。飛び散る破片。真理恵、何もできず、たた立ち尽くしている。

○タクシー(夜・七年前)

轍の家の前に停車するタクシーに、大荷物を抱えた真理恵が乗り込んでくる。

運転手「じゃあ適当に、ビジネスホテルまで行っちゃいますね」

真理恵「お願いします……」

車、発車する。

真理恵、ふと窓の外を覗く。

ひとつ、二階に明かりのついている部屋がある。そこから、姿が顔を覗かせる。

姿の口が、何やら動いているが、何を言っているの聞えない。車から家は、あつという間に見えなくなる。

○ビジネスホテル

真理恵、疲れ切った顔のまま、部屋に入っていると、そのままベッドに寝そべり、

目を閉じる。

脳裏に先ほどの姿の口パクが過ぎる。

姿(声)「……さん」

真理恵「……え？」

姿(声)「おかあさん」

真理恵、泣き崩れる。

真理恵「ごめんね、ごめんね……」

○保育園・職員室(七年前)

真理恵、応接用の席に座っている。目の焦点が定まらない。向かいには、園長の女性と、保育主任の男性がいる。

園長、真理恵に紙の束を差し出す。それぞれの紙には「日向真理恵先生は、

園児保護者の男性数人と関係を持っている淫乱女」という内容が書かれている。保育主任「既に、保護者にもう相当数出回っているみたいですね……」

園長「……では日向先生、これは全くの事実無根ということではないんですね」

真理恵「デタラメです、こんなの……」

保育主任「では、これは？」

怪文書には、「日向真理恵は園児の保護者と不倫し、家庭を破滅に追い込んだ」と。

真理恵「わかりません……」

園長「え、わかりませんか？事実なの」

真理恵「……私がその人と親しい間柄だったになった頃、既に別れた時間柄でしたが、それが本当だったかはわかりません」

園長「ということは、日向先生が、保護者の男性と交際していたのは、そうなのね？」

部屋にいる職員たちが、真理恵たちをちらちら見ている。

真理恵、それに耐え、ただ俯いている。

○保育園・庭(夕・七年前)

下校時刻で、保護者たちが園児をむかえに来ている。真理恵、浮かない顔のまま、園児たちを見送っている。

保護者たちが、真理恵に視線を向ける。

(声)「真面目そうな顔して、やることやってんのね」

(声)「うちの旦那、とられたらどうしよう」

(声)「俺もイチかバチか、声かけてみようか」

園児の一人が、真理恵の顔を覗く。

園児①「先生？」

真理恵、吐く。吐瀉物、その園児の顔にかかる。どこからか悲鳴があがる。

○仁科の家(六年前)

仁科、ベッドの上で熟睡している。彼の腕の中には、若い女。

その仁科の彼女、不審がりながら目を覚まし、仁科の身体を揺さぶる。

仁科「……(寝ぼけ)なに、どうしたの？」

仁科の彼女「なんか、変な音しない？」

仁科、耳を澄ます。

こつん、こつんという音が、何度も連続して聞えてくる。

○轍の家・庭(夜)

真理恵、二階の姿の部屋に向かって、小石を緩く投げ続けている。しばらくそれを続けていると、後ろから肩を叩かれる。振り向くと、警官が二人立っている。

警官①「何してるの？」

真理恵「(動揺)いやあの……この家の者です」

警官②「家の人は、知らないって言ってるよ」

真理恵、二階を見上げる。

姿の部屋には、明りがついており、仁科がこちらを怪訝な顔で見ている。

真理恵「……待って」

警官①「ここじゃなんなんで、場所変えて話聞かせてよ、ねっ」

真理恵「(二階に)ねえ姿君、あの時、なんて言ってたか、聞かせてほしいの！もう一回言つてよ！お願い」

真理恵、泣き叫びながら、警官に連行されていく。

○ソーブランド・フロント(二年前)

中年の男性客が出てくるのを、ボーイが待ち構えていて、一札する。

ボーイ「ありがとうございます……本日はいかがでしたか？」

男性客「(しかめっ面)……一言で言うよ。辛気臭い」

ボーイ「申し訳ありませんでした！」

男性客、不機嫌のまま帰っていく。

店長が、バックヤードから顔を出す。

店長「またか……」

ボーイ「もう十六回目ですよ、幸さんについてお客さんがああいふ顔するの」

店長「辛気臭いって言われるのは、もう22回目だぞ……」

入口に、真理恵の写真が貼られている。「幸 25歳」と添えられている。

○ソーブランド・浴場

裸の真理恵(39)、くたびれきった顔で、店用の服を着ている。

○真理恵の部屋(二年前・夜)

真理恵、部屋に返ってくる。

明りをつけ、買ってきたコンビニ弁当を、まずそうに食べていると、隣の部屋から、よしのの声が入ってくる。

よしの(声)「ちよつとぐらい援助してくれたっていいでしょ？誰があんたをここまで……」

……もしもし？もしもし！

やがて、よしのの声が、涙に変わる。

真理恵「……大丈夫ですか？」

よしの(声)「え？……ああ、ありがと。ごめんなさいね、うるさかったでしょ」

真理恵「いえ、そんな……」

よしの(声)「……なんでわかつてくれないのかねえ」

真理恵「え？」

よしの(声)「そりゃ、お金がほしいとは口では言ってますけどね、勿論ほしいけど、そ

れだけじゃないんだよ。それぐらいしか、
コミュニケーションのとり方がわからない
んだって、わからないのかねえ……わかっ
てくれないんだよね、子供って」

真理恵「子供？」

よしの(声)「そう、厄介なものだよ」

真理恵「(急に声が明るくなる)……私にも、

子供がいるんです！」

よしの(声)「へえ……意外。いくつぐらい？」

真理恵「もう、中学生になるかなあ」

よしの(声)「会ってるの？」

真理恵「会えないですよ……私なんて、本当
にダメで、ロクでもない女だけど……でも、
彼は私のこと、お母さん、って言ってくれ
るんです！」

よしの(声)「お母さんって言ってくれるの……

……え？会ってないのに？」

真理恵「はい！」

真理恵、よしのと話しながら、どんどん
顔が笑顔になっていく。

× × ×

真理恵、死んでいる。

そこに、宅配業者の男たちが現れ、死体
を見ている。

宅配業者②、遺品整理をはじめ。部屋
にある様々のものを、可燃と不燃と産廃
にわけていく。その中に、姿と仁科と真
理恵が笑顔で写る写真が混ざっている。
宅配業者①、死んだ真理恵の顔に、黒い
ビニール袋を被せる。

× × ×

眠っていた金子、起きる。

眼前に、真理恵の瞳。

金子「(瞳に)……行こうか？」

金子、真理恵の瞳を持って、立ち上がる。

■外岡家・リビング(朝)

外岡と恵美、朝の準備でバタついてい
ると、縁が一人テレビに見入ってる

恵美「ホラ縁、いつまでもテレビ見てないで。

もうバス来ちゃうわよ」

縁「こないだのおじさん、出てる」

恵美「え？」

テレビのニュース番組に、マンシヨンの
監視カメラに映る金子の姿が映っている。
外岡と恵美、呆然とする。

キャスター「警察は現在、監視カメラに映る
作業服姿の男について調べを進めていま
す」

■ニュース番組

轍のマンシヨンの前に、消防車や警察が
集っている姿が映る。

テロップ「高級マンシヨン火災現場から、三
人の切断遺体？」

キャスター「昨夜遅く、神奈川県川崎市のマ
ンシヨンで火災が発生し、一世帯分が全焼
焼け跡から身元不明の遺体が三体見つか
りました。警察は、部屋の住人である男性の
安否と、マンシヨン内に設置された男の行
方について……」

■仁科家

仁科、慌てて鞆の中に自分の荷物を詰め
込んでいます。

仁科「(取り乱して)なんだよもお、あのバカ
……姿、早く来い！頼むから、こんな時ぐ
らい、言うことを聞けよ！」

足音が聞える。仁科、姿だと思い、その
まま会話を続ける。

仁科「遅いぞ！さっさと行くぞ。いいか、し
ばらくこつちには戻れないから……」

だが、返答がない。

仁科、振り返ると金子が立っている。金
子の手には、包丁が握られている。

金子「……また来たよ」

仁科「あの火事は、お前か？何を勘違いして
るのか知らないが……」

金子、仁科に襲いかかる。仁科、必死に
抵抗し、堪える。

仁科「抵抗しながら」殺したのは、私じゃない！本当だ！」

金子「この期に及んで……」

仁科「俺は轍に、死体の処理を頼んだだけだ！

俺はあいつの死体を見てもないんだ」

金子「ウソが下手過ぎる。じゃあ誰がやった？

なんのためにお前がそんなことをする？」

仁科「それは……」

とその時、金子、後ろから何者かによって、スタンガンを後ろから当てられる。

全身が痙攣し、その場で動けなくなる。

いつの間にか、そこに全身が焼け爛れ、

包帯を巻いた轍が、そこに立っている。

仁科、轍の姿を見て、怯える。

仁科「お前……」

轍「毎度あり……経費は後日清算つうことで」

仁科「黙って頷く」

轍「あと、こいつ運ぶの手伝ってくれませんか？私の体、こんなもんで」

仁科、頷き、言われるがまま金子の身体

を持ちあげる。

轍、金子のポケットに入っている瞳に気

付き、それを取り出す。

轍「……バカな奴だ」

と、部屋に姿(ヒ)が入ってくる。三人の

様子を見て、固まる。

轍「やあ、姿君。おはよう」

轍、姿に真理恵の瞳を見せる。

轍「これ、何かわかる？」

仁科「やめる……子供だぞ」

轍「ほうら君のお母さんだよ。君が殺した」

姿「……」

轍「最初にメールくれたの、君だよな？」

金子、身体中を痙攣させながら、まだ意

識はあり、会話は聞いている。

姿、真理恵の瞳から目を逸らす。

……だが、瞳の方は、俯く姿のことをじ

っと見つめている。

○真理恵の部屋(一週間前)

部屋の家電が鳴る。真理恵、それに出る。

真理恵「もしもし……誰ですか？何も用がないなら、切りますよ？」

真理恵、受話器を置くが、受話

器から漏れ聞こえる声を聞くとはっとな

り、再び受話器を耳に当てる？

真理恵「……姿君、なの？」

○駅前(一週間前)

人通りの多い駅前の、目立つ時計台。真

理恵、その下で、そわそわしながら立っ

ている。

すると、前から学生服姿の男子が、前か

ら真理恵に近づいている。姿だ。

姿「あの……」

真理恵「はい？……もしかして、姿君？」

姿、頷く。

真理恵、姿を抱きしめ、涙を流す。

姿、抱きしめられながら、全くの無表情。

○マンション・廊下(一週間前)

真理恵、廊下の角から顔を出し、周囲を

執拗に確認する。

真理恵、誰もいないのを確認し、姿を歩

かせ、自分の部屋まで通す。

○マンション・真理恵の部屋(一週間前)

真理恵、台所で料理をしている。

テーブルで待っている

真理恵「ごめんねえ。なんかこそこそしちゃ

って……あんまり堂々と、子供連れてこれ

るようなところじゃないから……」

姿「いえ……」

真理恵「まあ、もう入っちゃえば大丈夫だから……ゆっくりしてって」

姿「……」

姿、部屋の中を、くまなく見回している。

× × × ×

× × × ×

テーブルに、向いあって座る二人。

姿の前に、ハンバーグと海老フライのプ

レートが置かれているが、あまり減っていない。

真理恵「ホラ、遠慮しないで食べてよ」

姿「はい……」

真理恵「姿君、覚えてる？はじめて家行った時、こうやって料理作ったの。姿君がリクエストしてくれたんだよねえ」

姿「まあ……」

真理恵「うん……そうなの」

二人の会話、途切れ、沈黙する。

真理恵「……なんで家出したの？」

姿「……」

真理恵「お父さんと、何かあったの？」

姿「まあ……」

真理恵「ケンカでもした？」

姿「うん……」

真理恵「まあ、あんまり喋りたくないか。あ、あいうお父さんだしね。それが嫌だから、私も出てっただし？」

姿「ああ……」

真理恵「でも、わざわざ私に連絡してくれたってことはさ、何か言いたいことがあるんじゃないの？」

姿「実は……お願いがあつて、です……」

真理恵「もう、そんな固い話し方、やめてよ。」

もっと気軽にさあ。お願いって？」

姿「あの……お金、貸して？」

真理恵「え？」

姿「お金」

真理恵「……それはえーと、なんのために？」

姿「帰りたくない、から……」

真理恵「困ったな……あのね、姿君にお金を使うのは全然惜しくないの。でも、姿君が路頭に迷うためのお金は貸せない。それは、危なっかしいもの」

姿「でも……」

真理恵「そうだ、しばらくここにいればいいじゃない……とりあえず、二・三日様子見る感じで」

姿「うん……」

真理恵「……なんだったら、ずっとここに住んじゃう？みたいなの」

姿「……」

真理恵「なーんて、冗談冗談。忘れて、さ、

食べましよう。冷めちゃうよね」

真理恵、料理を食べますが、やはり姿の箸は進まない。

× × ×

夜になった。明かりは消え、並べて敷かれた布団で眠る、真理恵と姿。

と、姿が急に起き出す。

姿、横で寝ている真理恵の顔を覗く。穏やかな寝顔を確認し、立ち上がる。

携帯電話の明りを頼りに筆筒に向い、開けてそれを漁りだす。

と、何かを見つけだす。明りを照らすと、それは真理恵の源氏名の入った名刺の束である。

姿「(舌打ち)」

真理恵、名刺を戻し、改めて筆筒を漁りだす。しばらく続けていると、銀行の預金通帳を見つける。

姿、慌てて通帳を開く。残高が一千万を超えている。

真理恵「姿君？」

姿、慌てて振り返ると、真理恵が起きていて、後ろに立っている。

真理恵、姿の持つ通帳が目に入り、顔が蒼ざめる。

真理恵「何してんの？」

姿「……なんでもねえよ」

真理恵「今、それ盗ろうとしてた？」

姿「してねえよ」

真理恵「ねえ、なんでそんなことするの？ここにいてっつてことで、一旦落ち着いたんじゃないかったの？」

姿「あんたと一緒になんて、暮らしたいわけないだろ」

真理恵、姿を抱きつく。姿、必死で真理恵を振りほどこうとする。

真理恵「なんでそんなこと言うの？私は姿君の……お母さんでしょ？」

姿「は？勘違いすんなよ、ただの親父の女だった女のくせに？」

真理恵「……言つてくれたじゃない、あの時、私が出てく時、窓から私のこと……お母さんて、言ったじゃない」

姿「覚えてねえよ、そんな昔のこと！」

姿、真理恵を振りほどき、突き飛ばす。

真理恵、倒れて、頭を壁に強くぶつける。

姿、倒れた真理恵を覗く。真理恵、全く動かない。姿の顔、一瞬で蒼ざめる。

○轍の家・書斎(夜)

仁科、名刺入れを開け、沢山の種類の名刺を漁る。その中から、轍の名刺を見つけたす。

姿、正座で座らされ、申し訳なさそうにしている。

姿、仁科に預金通帳を差し出す。

仁科「(通帳を覗き)……これだけあれば足りるだろ……これに懲りたら、二度と勝手な真似するなよ」

姿「……わかったよ」

仁科「……なんだその言い方は？」

姿「……」

仁科「誰が助けてやったと思ってる？」

姿「はい……」

仁科「お前もあの女と同じだな、ロクなことをしない」

姿が、力なく俯く。

■老人ホーム・居室(夜)

気絶していた金子、ベッドに寝かされ、手足は拘束バンドで括りられ、身動きがとれない。

その傍で、轍が斧を研いでいる。

轍「うちが、善良な介護施設じゃなくて、これほどよいと思つたことはないな」

金子「轍……」

轍「……金子ちゃん、目え覚めた？起きるまで待つてたんだぜ」

轍、金子の足に斧を振りおろす。

激痛に泣き叫ぶ金子。

轍「一太刀じゃいけねえなあ、なかなか大変なんだな、これ」

金子、斧を何度も金子の右足に叩きつけ、ついに足がぶった切れる。

轍「いくらでも泣いていいぞ。ここにはボケ老人しかいない。お前が今まで消した、数々の人間の痛みを存分に思い知れ」

轍、金子に、切り取った足から肉をそぎ落とすところを見せる。

轍「ほうらどんな気分だ？自分の足だったモノが、目の前で切り刻まれてくのは」

金子「……」

轍「まだまだこれからだぞ。お前はゆっくりゆっくり、最後の一瞬前まで自分の身体が消えていくのを見続けることになるんだ……よし、もう一本行こうか」

金子、必死で抵抗するが、轍の斧が容赦なく左足に振り下ろされる。

× × ×

金子、括られたままの全ての手足が切断され、芋虫状態になっている。

金子「……もう許してくれ」

轍「馬鹿許さねえよ、俺がお前許したら、全財産と俺のフェイスは、返ってんのか？」

金子「許してくれ……もう俺、十分にやっただろ？こんなになつてんだ、お前のために」

金子の視線の先には、真理恵の瞳の入った瓶がある。

轍「……ちよつと待て。お前、これ(真理恵の瞳)に言つてんのか？」

金子「……殺してくれよ」

轍、笑いながら、真理恵の瞳の瓶を手にとる。

轍「お前、これと知り合ってたんだってな？」

金子「殺して……」

轍「似たもの同士だな、こいつも、お前も。」

届きもしねえ相手を追っかけ続けて、相手にもされないで、最悪にくたばるんだ」

金子「……真理恵」

轍、瓶を壁に叩きつけ、割る。床に転がる真理恵の瞳。

轍「さあ、大事な元カノとお別れの時間です」

轍、真理恵の瞳を靴で踏み潰そうとする。

だが、瞳がそこで、急に転がり出し、轍の靴から逃げていく。轍、瞳を追うが、ころころとイレギュラーに転がり、なかなか捕まらない。瞳、金子のいるベッドの前で動きが止まる。

轍「……手間かけさせやがって」

轍、改めて真理恵の瞳を踏もうとする。

だが、寸前で、また真理恵の瞳、また轍の足をよける。仁科、足の着地点を間違え、思いがけずベッドの金子の元へ倒れる。傷口にあたり悶えるが、仁科の身体が自分の射程距離内にあることに気付く。金子、轍の首筋に噛みつく。轍、必死に抵抗するが、金子は決死の力で、轍の喉仏を噛み千切る。轍、首から血を噴き出し、絶命する。

金子「(口から肉片を吐き出し)……まだ、死なせてくれないのか？」

金子、真理恵の床に裸で転がる真理恵の瞳を見つめる。

金子「一度でいい、何か答えてくれ、お願いだ、真理恵……」

だが、何も起きない。

部屋の外が、何やらばたついている。

× × ×

職員たち、血相を変えて部屋の中に駆けつける。血に染まった部屋と、轍の死体。

だが、金子の姿は消えている。

○老人ホーム・前(夜)

人気がない道路を、金子が芋虫状態のまま、ひたすら這っている。

○仁科の家・姿の部屋(夜)

姿、部屋に入ってくるなり、明りをつける。すると、部芋虫状態の金子が横たわっている。絶句する姿。

金子、口から何か吐き出す。姿の前に。

真理恵の瞳が転がる。姿、恐怖でそれを見つめることしかできない。

金子「(息も絶え絶え)……やる。俺はもう疲れた。保管しようが潰そうが、それはお前の勝手だ」

姿「……」

金子「だが、忘れるな。こいつは、ずっとお前を見ている。お前はそれから逃げられない。最後まで、な……」

金子、息絶える。

仁科、しばらく動けない状態が続くが、やがて意を決し、真理恵の瞳を潰そうとする。だが、できない。

真理恵の瞳が、じっと姿を見つめている。

(終)